Atlas'
-I-
Orare pro me
Mea culpa
mea culpa
mea maxima
culpa
Miserere
nobis
Kyrie,
eleison
In nomine
Patris,
et Spiritus
Sancti
聖
霊
火
Studio ***46
Imanu'el
By faith alone, by grace alone, glory to God alone.

目次

「霊」：Imanu'el
謡 3
寂 5
__soul:『白火』 6
__spirit:『赤火』 18
__anima:『黒火』 31
. 42

「霊」：Imanu’el

謡

親殺しのパラドックス。時間というものを科学的に考える人間界に来た時に、死神たる吸血鬼が興味を持った一つがその与太話だ。

もしも時間を移動できる「力」の持ち主 X がいたとして。X が過去に戻り、自らの親を殺せば X は生まれなくなる。しかしそう未来が変われば「親を殺しに来る X」自体が存在できず、X の親は殺されようがない矛盾が生じる。

これに対して、X が過去で親を殺せば、X がいた未来とは別に「X の親のいない世界」ができ、X が存在するための元の未来は変わらないとするのが並行世界の概念らしい。しかしその説でも、X の親が減る世界に X がそのままいる妙、世界全体の存在者の質量が変わる問題があるとされる。結局のところ、「時間移動は不可能」と結論するのが最も無難だという。

吸血鬼が知る、ある幻の中で、「自らが発生する世界を消す」少年がいた。だから吸血鬼はこの話に惹かれた。

普通に考えれば、少年が自らを消すには、少年の生まれる過去を変えなくてはいけない。しかしあの少年はそんな「不可能」なことをしなかった。

少年はただ、「知って」しまったのだ。自らが存在しない世界は有り得て、自らが在る現世こそが幻であるのだと。

後に吸血鬼は、その幻の裏方となった天使の上司に尋ねた。

「『知った』だけで.....それだけで世界って、変わるものなの？」

少年がいた世界を幻として、吸血鬼を少年のいない世界に引き戻した上司（ナギ）。何かと吸血鬼に死神の仕事を頼み、人間界にも派遣した天使は、この頃から掴み所のない憂いを気配に漂わせていた。

「そうね。むしろ、時間移動という反則技なしの方が、世界は確実に変わるみたいよ。それが『観測者』と『神器』の引き起こすゲヘナのさざなみ.....世界の果ての炎獄（ゲヘナ）が燃え上がらせる、新たな世界を消火する唯一の方法」

しかしつい先日、時を渡る力を持つ「悪神」が、消えた少年のいた幻の世界を再び現実にしてしまった。それは「悪神」が己を消すためで、望みを叶えてやりたかった吸血鬼は、幻だった世界を現実と受け入れた。

けれど「幻だった世界」は所詮、分岐でできた時空の伏流。「時を渡る」一つで、「悪神」や死神の吸血鬼が残る時空も消えない。

本当に今この世界を燃やすのならば、探すは「観測者」と「神器」。

「観測者」の目に映る世界こそまことの世界。その「観測者」に差異をみせる接点、世の矛盾が顕れた結晶が「神器」なのだ——

-in spirit-

寂

それならここで、賭けをしようか。
白(しら)らな空に浮かぶ島で、死者のように眠る番人にその「悪神」は言った。

「あんた達は人形か、それともヒトなのか。オレに答を教えてくれる？」

先日に「悪神」に心臓を奪われ、最早虫の息である番人は抵抗できない。
冷たい石の床に張り付けられる。その黒ずくめの神剣で貫かれる瞬間を回避する術は無かった。

「周りを優先する人形か、己の望みを持つヒトか。その答を見届けるまでは.....ツバメを返してやるよ――」

それは無用な賭けであるのに。天の鍵を突き立てられた番人は、声一つも返してやれない。ただ番人の全身を赤く侵していく、「悪神」の呪いが憐れだった。
人形かヒトか、答はもうとっくに出ていること。「悪神」も気が付いているだろうに、おそらくまだ見ぬ新たな世界を望んでしまったらしい。

たとえ人形でもヒトでも、彼らに光ある未来などない。
それでも全ては、たった一人の過(あやま)ちのため。その血を受ける者の全てに、炎獄(ゲヘナ)の扉は開かれてしまった。

「『汐音(しおん)』を救えるものは何？　神でも悪魔でも、オレでもないなら――」

そもそも事の起こりは、人形の番人が守り続けてきたヒトの心。
探し求めた生きる理由に、その名が与えられた時のこと.....。

_soul:『白火』

世界は沢山存在してる。だから、汐音（しおん）が望む世界を受け入れるよ、と紫苑色の髪でツインテールの少女が遠い紅の目で笑った。

そう言って常闇に迎えに来た悪魔使いの少女を拒み、送り返した冷たい水底。そこが最早、ゲヘナと呼ばれる火の池になったことを、闇に隠されたばかりの吸血鬼は知らなかった。

自らの闇に戻ったつもりの、吸血鬼を待っていたのは、思いもかけない現世での目覚め。

「あ、やっと起きた。本当にナギの言った通りだね。おはよう、汐音」
「.....え？」

突然開けた明るい視界には、見知った男児と知らない板目の天井。

ぺたぺたと、無表情な黒い目で黒髪の保育園児が頬を触る。自分が吸血鬼だとしかわからない吸血鬼は、まずつっこむべき現状を把握した。
「って、翼槞（よくる）.....!?　何で夕烏（ユウ）の中にいんの――!?」
「あ、やっぱりわかる？　まあ猫羽ちゃんの体にいればそうか。オレ達と似たように勘が良かったからね、猫羽（ねこは）ちゃん」
「って――猫羽、ちゃんの、体.....？」

わけがわからないまま、がばっと布団の上で起き上がると、端に座っていた男児が僅かに哀しそうに顔をしかめた。吸血鬼がそうやって、何の苦もなく起き上がったこと。それに安堵と悲哀が入り混じる顔だ。

そもそも目前の男児は本来、魔力がやたらに強いだけの人間に過ぎない。その中身が何故か、吸血鬼が闇に隠される前にいた体の悪魔になっている。氷輪（ひわ）翼槞という、幾枚もの翼を持つ悪魔。汐音の名をもらった吸血鬼はその悪魔に飼われる一人格に過ぎなかったのに、何故今ここで、別のものとして対峙しているのだろう。

こたえは一つしかなかった。翼（翼）の悪魔（槞）は黒髪の男児の体を、吸血鬼（汐音）は紫苑色の髪の少女の体を、それぞれ勝手に使って向き合っている。

どちらも己の本来の体から離れている。だから現在、震える手で自分の体を確認する吸血鬼と、翼の悪魔は初めて体内以外で会話することになった。

やーばーいー。吸血鬼に真っ先に浮かんだ感想はひたすらそれだった。
「ちょっとマテ、これ本当に猫羽ちゃんの体!?　うわマジだし、ていうかここ何処さ、こんなん絶対ツバメに怒られるじゃん!?」
知らない畳の部屋で起き上がり、壁にかかっていた鏡に自分を映す。そこには確かに、心だけで引きこもった吸血鬼を闇まで探しに来てくれた、相方の妹の姿があった。
眠っていたので、髪の毛は普段のツインテールから下ろしているが、吸血鬼のいた世界でも珍しい紫苑色の髪と、ぱっちり睫毛の紅い目は紛れもなく「棯(うつぎ)猫羽」のもの。吸血鬼が相方の「山科ツバメ」に頼まれ、この人間界で見守っていた人間の少女なのだ。
壁に食いつく少女吸血鬼の元に、とことこと、黒髪の男児が眠そうな顔でやってきてパジャマの裾を掴んだ。
「ツバメ、すぐ帰ってくるから、後の事情はそっちできいて。オレは眠るから、ツバメが帰ってくるまで夕烏のお守りは任せたからね」
え？　と聞き返す暇もなく、かくんと目を閉じた男児が床に崩れ落ちた。
今まで男児の体を使っていた悪魔が意識を落したのだろう。それでも気配はまだ男児の内から感じられるが、寝顔は素朴な保育園児のものに戻っていた。

わけがわからないが、勘が良いのは吸血鬼の以前からの取り柄だ。
とりあえずここは男児の家で、何故か「棯猫羽」がその一室で眠り、闇にいたはずの吸血鬼が猫羽の体を動かしている状況については確信できた。
「オレが猫羽ちゃんで、翼槞が夕烏だって.....？　夕烏は普通に生きてそうだけど、猫羽ちゃんの気配、感じられなくない.....？」
原因はわからないが、とにかく現状を把握していく内に背筋が冷えていく。
枕元に猫羽のスマホがあったので覗いてみると、そこには猫羽を心配するメールと不在着信の嵐が展開されていた。
「まだ八月か.....オレが消えてから、そんなに時間はたってないんだ」
猫羽は高校に通うために人間界に来た異世界の少女なのだが、幸い夏休み期間中だろう。人間生活を学ぶためにバイトもしていたが、そちらはそちらで猫羽について相談しているのをメールで確認した。ややこしくなりそうなので、今はまだ関わらないと決める。

ほどなくして、玄関が開き、傘をたたむ音がした。
どうやら外は豪雨らしい。あちこち濡れたツバメが先に洗面所に入り、タオルで体を拭きながらまずリビングに入ってきた。
リビングと和室が繋がっているのは、確かに夕烏という男児の家の一階だ。一度来たはずの家を思い起こしつつ、障子の隙間から、おそるおそるリビングを覗く。買って来たらしき物をテーブルに置いて、ソファに座るツバメが洗った足元を拭き直していた。

「汐音、目が覚めたのか。……何やってんの？」
「――何やってんの、じゃないし！　これ何、どうなってるの、ツバメ!?」

　ツバメの妹の体を使う吸血鬼を見ても、全く動じた様子がない。あまりの呑気さに、逆に吸血鬼の方が動揺してしまった。ばしんと障子を派手に開けて、立ち尽くしながら喚(わめ)く。
「猫羽ちゃんどうなってるの、何でオレがここにいるの!?　夕烏もさっきから全然起きないし、ていうか何でお前もこの家にいるの!?」
「それは多分、説明すると長いんだけど……とりあえず、外に出るから、これに着替えてほしいんだけど」
　ツバメが買ってきたのは、女物のＴシャツにスカートのアンサンブルだった。猫羽の制服をこの家の主――夕烏の母の陽子が洗濯してくれ、その間猫羽にはパジャマを貸してくれたのだが、生憎の雨が続いて制服が乾かないという。
　猫羽は昨日からこの家に泊まっている。目を覚まさないので、病院に行かないでいいの？　と心配する陽子をとりなし、起きたら教会に行くとツバメから言ってあるらしい。そもそも教会で倒れた猫羽をツバメが迎えに来て、何故かこの家に連れて来たという不思議な顛末を、とにかく着替える間にひとまず聞いた。

「……一応言っとくけど、猫羽の体に変なことするなよ、汐音」
　閉めた障子の向こうで言うツバメに、はああ、と大きな溜め息が出てきた。そういう問題か、と激しくつっこみたくなる。
「別に――翼槞の体と大差ないから、気にならないし」
「……え？」

　しまった。と思いつつ、猫羽の体をこうして使ってしまっている以上、その兄を安心させる方が先かと腹を決めて言った。
「言ってなかったけど、翼槞はそもそも女体型なの。そこにいたオレもむしろこっちの方が慣れてんの、だから何も変な気はないから」
「え……じゃあ、汐音達は女だったのか？」
「ちがーう！　そーいう特殊体型なだけで、遺伝子はれっきとした男！」
　ソファで待つツバメは本気で面食らっているようだった。この状況で驚くのがそっちか！　とまた喚きたくなる。それでもとにかく、さっさと着替えて教会に行くしかない。
　女物などわからないツバメが、適当に安い服を探したら子供用のような上下セットしかなかったのだろう。ひらひらのスカートを履くとさすがに足元の風通しが落ち着かない。面倒なので髪を両耳上で束ねるのも諦め、猫羽がいつも着けているリボンをポケットにしまう。強い雨の中を歩くにはこの方が良いだろう。

「夕烏も眠りっぱなしだし、詩乃(しの)サンに預けがてら、そっちも相談すんの？」
「ああ。とりあえず猫羽――汐音が起きたって顔を見せにいく。猫羽が消えたのは自分のせいだって、ずっと自分を責めてたから」
　教会にいる音戯(おとぎ)詩乃は、おそらく隠れた神官の家系の異能力者だ。陽子の友人でこの家にもよく来て、生まれながら強い魔力を持つ夕烏を可愛がっていたことを知っている。熱心なクリスチャンなのに、悪魔の翼槍と契約を交わした人間が詩乃だ。
　今回、吸血鬼が消える時に体の主である翼槍も眠りについたため、詩乃は猫羽が吸血鬼を探しに闇に行く手伝いをしたはずだが、その責任を感じていると見えた。
「じゃあ猫羽ちゃんは、闇から還らずにどっかに行っちゃったんだ.....」

　夕烏を背負ったツバメに続き、傘を持って扉を開けると、外はうっとうしくなるほどの雨天だった。
　陽子から今夜は、夕烏を教会に預けるよう頼まれているという。ツバメは妹の体を使う吸血鬼に振り返らずに、淡々と呟いていた。
「それは俺のせいだから。汐音も詩乃も、何も気にしなくていい」
　は？　と顔を上げる。背負う夕烏と傘に隠されて、ツバメの表情は見えなかった。無造作な短い髪が銀色である違和感に、吸血鬼は今更気が付いていた。
　そう言えばそもそも、吸血鬼より先に「悪神」に隠されていたはずの相方。銀色の髪は「悪神(時雨)」の色だったはずで、「ツバメ」は金髪に黒い目をしていたのに、今の青い目は「悪神」の金の眼からも遠い変わりぶりだった。

　訪れた教会では特に情報は得られなかった。ただ、猫羽を心配して死にそうな顔をしている詩乃に、とにかく夕烏の体調管理をよろしく、と押し付けてきただけだった。
「あれ、ツバメが猫羽ちゃんを迎えに行かなかったら、大騒ぎになってたんだろね.....」
「俺も驚いたけど、ナギに先に警告はされてたから。猫羽が連れて帰る汐音を絶対猫羽の体から出すな、そうしないと死ぬって」
　どうやら猫羽は、ここにある体から猫羽という心だけが抜けている。吸血鬼――汐音の意識と、元々持っていた霧の精霊の加護で、主なしの体は辛うじて生きている。
　ツバメなりに事情がわかる相手達とはすでに連絡をとっており、消えた猫羽の行方探しはもう頼んであるそうだった。
「それでオマエは、猫羽ちゃんの体と、それに憑くオレを守れって言われたわけ。そんなんで納得してるの、オマエ？」
　他でもない大事な猫羽のことなのに、ツバメの落ち着きぶりが汐音には不可解でならない。
　夕烏を教会に預けた後は、今度は猫羽の下宿に汐音を送ると言うので、二人で駅から雨の坂を上がっていく。激しい雨に打ちつけられる傘の下で俯くツバメは、これまでに見たことのないような沈痛を浮かべていた。
「納得はしてない。でもできることもない。ここはいずれ崩壊するってナギが言ってた」
「.....へ？」

「こうして汐音と話せてることも、今の時間は全て幻だって。意味は全然わからないけど、何かが変なのはわかるんだ.....汐音は感じない？」

　ちょうど道端に公園がある所で、ツバメが汐音の方を向いて立ち止まった。
　人間界では特殊なその公園を背にしているからかもしれない。不思議な神域に近い公園の手前で、猫羽の体の心臓も煩く波打ち始めた。
「変って.....オマエがそうやって、諦めてるのも含めて、何もかもが変だよ」
「.....」
「オマエはツバメ？　　それとも時雨（しぐれ）？　　オレが消えてからオマエはどうなったの？」
　よく考えれば、それが全ての違和感の発端だった。「汐音」が消える時、ツバメは「悪神」の時雨に隠された。汐音の宿っていた心臓を翼槞から抉り出したのは時雨なのだ。
　目前にいるのは、髪と目色が違うがツバメの気配だ。何故まだ「悪神」に隠されず、ツバメの意識を取り戻しているのだろう。
「翼槞が夕烏に憑いてることも含めて.....オマエ達はあれから、どうしてたの」

　心臓を失った翼槞は、この世界での翼槞と言える鏡の夕烏に翼を分け、そこから夕烏の魔力をもらうことで命を繋いでいるはずだ。そのまま本来守るべき天の国に戻り、眠っていると思っていた。
　ツバメは時雨化したままだろう。しかし時を渡る時雨の目的は、ツバメがそもそも「悪神」に隠されず、汐音も存在しない世界をこの世界と同期させ、運命を丸ごと変えてしまうことだった。それには汐音の存在が余剰物となってしまうため、汐音は自ら闇にこもることを決めたというのに。
「.....世界は変わらなかった。それならオマエは時雨のままのはずなのに.....何で戻ってこれてるのさ？」
　その侵蝕は最早時間の問題だった。ツバメは本来、「悪神」として秩序の管理者をしなくてはいけない。ツバメの好きな山科鶫（つぐみ）が生きている間くらい、ツバメとして生きる、と「悪神」の時雨がさぼっていただけの話だ。
　力の弱るこの人間界にツバメを呼び、山科鶫から引き離した途端、ツバメは時雨に成り代わられてしまったのだ。今、鶫の元に帰したならともかく、人間界にいるままツバメに戻れる理由が汐音には想像がつかない。

　怪訝にしている汐音が不思議とばかり、ツバメの方は苦い顔で笑った。
「だから、俺も汐音も、猫羽が連れ戻してくれたんだろ。.....猫羽がこうして、消えてしまうことと引き換えに」
　そんなことは汐音もわかっている。詳細は不明にせよ、汐音が先刻から違和感を持ってやまないのは、猫羽の犠牲をツバメが認めていること自体だ。
「だからそれだって！　　これ、オマエなら時雨になっても猫羽ちゃんを探しにいく場面じゃない？　　オレを猫羽ちゃんの下宿にのんびり送ってる場合じゃないでしょ」

猫羽がどうなったのかはわからない。どう考えても、それは多分、猫羽に最後に会ったはずの汐音の責任だ。自然と声が荒ぶってしまう。

まだ降り続けている強い雨のせいで、珍しく真面目に傘をさしているせいで、半ば隠されたツバメの表情がよくわからない。

猫羽の体を、このまま守れと言うなら守る。それには汐音一人で十分だろう。猫羽が護身用に使っていた魔法の鎌も、スマホから取り出せるのを出る前に確認できている。だからツバメがここまで付き添う必要も皆無だった。

何も答えずに、無言でツバメがまた歩き出した。改めて坂を登り、猫羽の下宿のマンションが見えてくる。青い無表情で銀髪の後ろ姿は時雨のようにも見えた。

とにかく自ら猫羽を探しに行く気はないらしい。下手をすれば汐音が妹になることをとっくに受け入れている。だから自力で状況を解決しようとしていないのだとわかる。

「もーっ！　そんなん本気でオレが猫羽ちゃんやっちゃうぞ、ばかー！」

ぴちゃぴちゃと水を踏んで後を追いかけると、翼槍の体にいた頃と比べ、人間の少女であることは何と身が軽いのだろうと思った。生来健康で運動神経抜群の猫羽ということもあるだろうが、以前は始終何処かに不調を抱え、身体能力の高さと引き換えに消えない渇きが体にあった。

汐音が宿っているせいか、猫羽の体の最奥から、同じ渇きが僅かに滲み出しつつある。それが猫羽の引き受けた吸血鬼の血の影響とは知らない。

帰ったらまず絶対、改めて事情をきいてやる。そう思っていたのに、猫羽の下宿に入るなり、リビングのソファでツバメは寝付いてしまった。

「……このソファ、元々、オレ達の部屋にあったやつじゃん」

汐音もツバメも消えたので、猫羽が後始末をしてくれたのだろうか。彼らもこの世界に来る中継地点――橘診療所のお下がりでもらった家具だったが、汐音は気に入ってよく寝床にしていた。

「寄りたくないっていうから、診療所はスルーしてきたのに。オマエが眠るんじゃそっちに聴きにいくしかないじゃん」

眠っても髪が銀色のままのツバメ。そうしていると時雨にしか見えないのだが、横向きに丸まる姿はかなり疲れていることがわかる。

「まいったなあ、猫羽ちゃんの血を勝手にツバメに分けるわけにもいかないし……てかさすがに嫌がるだろうし、全方位から怒られそう……」

さて、ここからどうしたものか。ツバメの体調相談も含めて、橘診療所を訪ねるのは無難な選択に思える。院長の嫁である「ナギ」が汐音のことを言っていたというのだから、汐音が猫羽の体を使うこの状況については既に知っているはずだろう。

「でも……寄りたくないってさ。理由くらい教えろよな、コイツ……」

じーっと、床で膝を抱えて恨みがましく見つめても、ツバメは全く起きそうにない。

こうした時に、心から信頼して頼れる相手がいないことを、今更ながらに汐音は実感することになった。
「ナギも何考えてんのか怪しいところあるし.....翼槞の夕烏は長く起きれそうにないし、猫羽ちゃん関係の奴らは下手したら怒られそうだし.....」
この状況は汐音が望んだものではない。けれど責任がないかと言われると、至って怪しい。猫羽を闇から送り返そうとして、その後のことを汐音も何も憶えていないからだ。
初めて「汐音」として、目が覚めた時によく似ていた。何故自分がここにいるか、あの時も全くわからないまま、なしくずしに状況を受け入れていた。

「.....ツバメにはああ言ったけど、この体でホントにシャワーとか浴びていーのかな、オレ」
することがないので、猫羽のパジャマを探し出し、ついでにバスタオルなどもしっかり置き場所を確かめた。雨で体が湿気ているので、温かいお湯を景気よく浴びたい。
「まぁ、いつまでこのままかわかんないわけだし.....それまでずっと、お風呂入らないわけにいかないし.....」
猫羽はほそっこい見た目のわりにしっかりしているが、根が妹キャラなので周囲には可愛がられている。この状況で吸血鬼にキズモノにされたなどと言う者はいないだろうが、責任を取れと言われたら自分(翼槞)は取るだろうか。しばし考える。
「むしろそんぐらいしないと、アイツずっと一人身かなぁ.....うん、迷うことなかったかも？」
やはり怒られそうな結論しか出せなかった。考えても無駄なことはやめにして、ツバメが起きないのが悪いと決め、バスタオルを取って洗面所に向かった汐音だった。

猫羽がこのまましばらく起きないとすれば、人間の体なら食事をとらなければいけないし、この家での生活費もきちんと考えなければいけない。
シャワーも浴び放題ってわけにはいかないな。と珍しく真面目に検討しつつ、思い切って上着から服を脱ごうとしたその時だった。

――.....待ってたよ。『オレ』の併せ鏡。

「って――へ？」
洗面台の鏡に、何故か猫羽でなく、汐音そのものの姿が映っていた。
翼槞が優位な時の青闇の髪に、猫羽と似た細身の平坦な体幹、狭いなで肩。上のボタンをはだけた白いカッターシャツ。違うのはツバメのように、目が黒いことだろうか。

何これ、珍しいこともあるもんだなぁ、と。
ぽかんとしながら見つめていたら、鏡の自分が天使のように整う顔で笑った。

猫羽の下宿に、人外生物の干渉にしても、こんな子供だましの仕掛けがあったのだろうか。それはともかく、猫羽が失踪した手掛かりにはなるかもしれない。
何だおまえ。と淡々と返すと、何の悪戯かもわからない鏡像が、よくわからない目的を訴えてきた。

――オレをここから出して。そうすれば願いを叶えてあげるから。
「.....オレの願い？　猫羽ちゃんを連れ戻してくれんの？」

目前の相手からは大した「力」を感じない。人間ほどにも脅威ではない。
だから猫羽について、何かを探りたかっただけなのだが――

――それは無理だよ。だってオレはセイで、セイはシオンの影なんだから。
「へ.....？　セイって誰？」
あまりに心当たりのない話題に面食らった。それでなくともわからない現状が、ますますこじれてひねくれていく。
――シオンが望むなら、ツバメをずっとここにいさせてあげる。だからオレも受け入れて、シオン？

意味がさっぱりわからなかった。それでもこうした、望みを叶えると言う呼びかけそのものは、吸血鬼の頃の己を思えば相手の意図はわかる。
「おまえ.....猫羽ちゃんみたいな悪魔使い？　猫羽ちゃんと昔、契約した翼槞みたいにオレをはめて、何をさせようって言うのさ？」
この状況からは、それぐらいしか思いつかない。わかるのは目前の相手にほとんど「力」が感じられず、人間にしか見えないことだけだった。
悪魔と契約できるのは人間だけだ。猫羽と初めて出会った頃に、それで一介の吸血鬼から本格的に悪魔になった翼槞を汐音は知っている。
本来悪魔と人間の契約は、悪魔が人間の願いを叶え、代償に人間の魂を奪うものだ。しかし猫羽は特殊な悪魔使いで、「悪魔の願いを叶えるために悪魔の力を借りる」ことを主契約とし、基本的に悪魔のために動く代わりに、自身の魂も渡さなかった。そして猫羽が契約を交わす悪魔は、叶わない願いを持つ者ばかり。翼槞越しに知ったことだが。

返答を待っていたが、鏡の自分は穏やかに笑うだけで真意を言わない。
これはまず、捕縛方法を考えるべきか。どうしたらこの鏡像を固定できて、ツバメが起きたら見せられるか、悩み始めた直後のことだった。

――……こっちに来て……『風漓(かざり)』。

　何も知らない心の隙をつく。これほどそれが妥当な状況はない。
　「風漓」という唐突な名前。その霧の精霊を宿す猫羽の体が、汐音の意思とは無関係に硬直した。

――一緒に……ここから出よう？

　嫌だ、と言おうとした。けれどそれは、とてつもなく残酷な拒絶であると、本能的に猫羽の左手が自らの口を塞ぎにいった。まるで猫羽は、その精霊が「外に出る」邪魔をしたくないと言うかのように。
　わけがわからず戸惑う内に、鏡からうっすらと黒い手が差し出された。
　指以外を包むぴったりとした黒手袋は、確かに吸血鬼の頃の自分が大事にしていた形見の一つだ。

　空いた猫羽の右手が、勝手に上がった。
「……ツバメ……！」
　鏡の手をそのまま迷わず取ってしまう。これがとてもまずい事態ということだけは、汐音の全存在で感じ取った。

　今の時間は、全て幻。つい先刻のツバメの声が、脳裏に蘇る。
――ここはいずれ崩壊するって、ナギが言ってた。

　全ては何となくでしかない。しかしこの鏡の自分――「セイ」を、猫羽に見せてはいけなかった。それだけを汐音は悟る。
　これが猫羽の見つけた望み。そのために猫羽は自ら消えたことを、引きずり込まれる鏡の中で高鳴る胸に自覚させられる。
「ちょっ、まっ……！　　オレはそんなこと――……！」
　猫羽の内の汐音だけが、謎の闇へ連れ込まれるならともかく。
　猫羽の体ごと引っ張られ、周囲が黒く染まる現状に汐音はまだ抵抗を諦めなかった。
「――猫羽ちゃん！　　オレの望み、待ってくれるんじゃなかったの……!?」
　それは猫羽の性格を考えればわかる。鏡に映った者の悪魔使いのような挙動にしても、体が勝手に動いたことにしても、これは猫羽が起こしている何かのはずだ。
　猫羽なら必ず、良かれと思ってやっている。汐音自身も気付いていない、胸の奥の小さな望みの芽を掬って。

「オレは猫羽ちゃんに叶えてほしくない――自分で見つけて、自分で叶えたいから……！」

　どんどん黒塗りにされていく世界が、そこで僅かながらおし止まった。
　猫羽の体を使う汐音の、足元だけがライトに照らされたような形で、真っ暗な世界にそのまま降り立つことになった。
　とりあえず、何かに引きずられるのは止まった。ほっと息をつく暇もなく、手前にもう一つライトスポットが現れる。
　呼吸を整えようとしていた中、え。と前を見る。そこにやがて、足側からすっと幕が上がるように、一人の影が映されていった。

　黒い闇の中、拙い白の蝋燭のように、二つの人影が浮き上がっていた。
　猫羽の姿をする汐音の前に、もう一人用意された暗闇の住人。見覚えしかない冷たい笑顔に、猫羽の声のまま汐音は呟いていた。
「何で……翼槞じゃ……ない？」
「……」
　そこに立つのは明らかに、以前は汐音が体を使っていた吸血鬼――数多の翼を持った悪魔。
　しかしその目の赤が、以前の蒼とは遠い色だ。翼槞である時は青をとことん暗くしたような青闇の黒髪も、心なしか紫の艶があるように見えた。

　そもそも翼槞の意識は先刻まで、夕烏の体を使っていたはずだ。ここにいる者は実体として感じられ、眠る翼槞の本体だけだと思えば納得がいく。
「オマエ、誰……何で、翼槞の体を使ってんの？」
「……」
　敏い汐音に喜ぶように、僅かに赤い目が細められた。
　この何者かに体を奪われたから、翼槞は夕烏の体に遷ったのか。黒い手袋をしているので、鏡に汐音を連れ込んだのも目前の相手のはずだ。
　しかし心臓のない吸血鬼の体を、どうやって動かしているのか。何故わざわざそんな効率の悪いことをするのか、と真っ暗闇の中で訝る汐音に、抜殻の吸血鬼が青白く笑った。

　先刻までの黒い目の「セイ」とも、そこにいる赤い目の吸血鬼は違った。どちらにしても本来の汐音と同じ顔なのに、これまでの自分とは似ても似つかぬ穏やかな微笑みを浮かべている。
　状況がわからない以上、下手に動くことはできない。恨めしい思いで睨めっこをしていると、赤い目の吸血鬼がやっと口を開いた。

「.....賭けが、始まったから。オレはこれから、水門を開く」
「――え？」
「もう逃げることはできない。ようこそ.....ゲヘナのさざなみへ」

　それは懐かしくも、声変わりしていない「翼槞」とは違う聞き知った声。
　誰の声色か思い出せないでいる間に、赤い目の背後を覆い尽くすように白い炎が立ち上がった。広がる白のまばゆい背景に、スクリーンのようにある一風景が映し出された。

　白らな空に浮かぶ島で、死者のように眠る番人に、その持つ神剣を振り上げる黒ずくめの「悪神」。

――あんた達は人形か、それともヒトなのか。オレに答を教えてくれる？

「って――.....時雨.....!?」
　気付いたそばから走り出しても、間に合うわけはなかった。
　汐音が置いてきてしまった吸血鬼の体が、冷たい石の床に張り付けられるよう、黒ずくめの神剣で一息に貫かれた。
「待てよ、時雨.....！　何で.....何で――っ.....!?」
　映される白い炎の中で、成す術もなく、吸血鬼は灰に戻っていく。
　もう汐音が帰る体はないこと。その現実を伝えるのに余りある真っ白な空。
　だから翼槞は夕烏の中に来るしかなかった。そして、本体を失った意識はおそらく、消えゆく寸前だから起きていられないのだ。
「翼槞を殺る必要なんてないじゃん.....！　それなら最初から、オレ（心臓）を奪った時に殺せばいいだろ――！」

　汐音がこうして、闇に再び連れ込まれたことも気付かず、ツバメはリビングで眠っている。果たしてこのことを知っていたのだろうか。

――答を見届けるまでは.....ツバメを返してやるよ。

　時雨が光景の中で言ったこと。その吸血鬼は、人形なのかヒトなのかと。

――『汐音』を救えるものは、何？

何であれ、心臓のない吸血鬼に未来などない。汐音もわかっていた。

それでも全ては、たった一人の過ちのため。その血を受ける者の全てに、炎獄の扉は開かれた、と赤い目の吸血鬼が改めて言った。

「猫羽は汐音の血を引き受けてゲヘナに行ったよ。オレがこうして、ここに現れることができるために」

黒に戻った世界の中で、気付けば汐音は一人残され、崩れ落ちていた。

赤い目の吸血鬼の姿をする者が、誰なのかわかってしまった。だから猫羽が消えたということも、理屈ではないところで真実が伝わる。

己が心臓を失ってすらも、天の番人を続けた吸血鬼。先程にいたのは空っぽな彼の、眠る目を赤く染めた誰かだ。

それはかつての、翼槞の師匠の赤い鼓動。時雨がその残滓を引き受けて、剣の内に宿されていた者。

その赤の目に映る今後こそ、これから出会う世界の形を決める、とわかってしまった。

——ただ、汐音の望むままに。あんたと翼槞が、選ぶこたえは何？

そもそも事の起こりは、人形の番人が守り続けてきたヒトの心。

探し求めた生きる理由に、その名が与えられた時のこと.....。

-please turn over-

_spirit:『赤火』

鏡の自分に取り込まれかけ、途中で微妙に引き留まった。そのあと置去りにされた黒い世界で、汐音は猫羽に宿る霧の精霊に会うことになった。

霧の精霊である娘。元は翼槞の師匠である何でも道具屋の精霊使い、竜牙烙人（たつきラクト）を幼くした同じ顔の双子で、早逝して烙人の扱う精霊となった娘だ。

大きな紫苑色の目と長い髪で、「風漓（かざり）」と名乗る桜色のショールの娘は、病弱そうな長いスカート姿で、途方に暮れる汐音の手を引いて暗闇を歩いてくれた。

「ごめんね、アナタをここに巻き込んじゃって。出口は私もわからないけど.....一人にはしないからね」

悪魔使いの猫羽を魔の侵蝕から守るため、烙人は猫羽に精霊を遺した。「風漓」の名がついたのは最近だろう。精霊がいるならここは「力」の闇の何処かのはずで、猫羽の体で目覚める前にいた「天龍」と大差はない闇だ。

むしろどうして、猫羽に宿る精霊かつ「天龍」設計者である風漓が、天龍でなくここにいるのかが不可解だった。暗いので自分の姿もわからない汐音の前で、生前の旧い服らしき風漓の全身は、妙にはっきりと見える。

風漓には汐音がどう見えているのだろう。先刻までとり憑いていた猫羽の姿か、それとも翼の悪魔の姿だろうか。

「力」の本拠、時の闇で出会うものは、互いの縁（えにし）次第で姿を変える。たとえば風漓が生前の姿に見えるのは、烙人に死神の翼槞が関わっていた頃、死霊の風漓を葬送するか悩んだからだ。その時に烙人から感じ取っていた風漓のイメージが、おそらくここでは再現されている。

「.....あのさ。何で風漓は、ここにいんの？」

これは汐音が発した問いだが、風漓が手繰る縁が違えば、猫羽が尋ねたように見えているかもしれない。そもそも風漓が汐音を迎えに来る理由もなく、今回猫羽の体を汐音が使って、初めて出会った相手とも言える。

神性と直観を併せ持つ猫羽や時雨、または「天龍」が浮かぶ混沌の管理者橘桃花（トウカ）であれば、大体誰でもありのままの相手が見えるだろう。だから汐音は猫羽に見つけられた。また猫羽を混沌の水底に送り返した。

汐音自身は、縁者なら闇の中でも相手がはっきり見える程度。おそらく風漓が霧の精霊の本人であることは間違いないが、それだと余計に、何故面識のない汐音の元に現れたのかが何もわからない。

いったい風漓は誰を連れて、何処に向かっているのだろう。

一人にしないから。最初にそう言った遠い笑顔を、受け取るべきは汐音ではない。その確信が今も汐音を落ち着かせない。

――風漓。一緒にここから出よう？

鏡の自分がそう言った時、あの何者かは「セイ」と名乗った。それならその先で出会った風漓も、汐音をそう見ているのが自然に思う。誰のことかはさっぱりわからないが、そもそも風漓のことも汐音は知らない。

けれど風漓は、どうしてここにいるか尋ねた汐音に、気安く困ったように笑う。

「.....説明は難しいんだ。でも、私はこうしてないといけないから」

これは心を開いた者に出る反応ではない。特に鏡の自分が相手ならば、あの馴れ馴れしさに対して不相応な緊張感だ。

要するに、優しいがほぼ初対面の汐音として接されている気がする。そういう細かなことを尋ねようとすれば、何処かへ逃げてしまいそうな臆病さも感じて聞き難い。

繋がれた手から、流れてくるのは親愛と罪悪感。

これは風漓から話してくれるのを待つしかない。大人しく腹を決めてついていく。翼槞が時雨に灰に戻されたこと、赤い目の翼槞が現れたこと、猫羽の行方、気になることは山とあったが、焦ったところでどうせ取り返しはつかないのだから。

しばらく歩くと、見たことのある暗い公園に出た。猫羽の下宿まで送られた時、ツバメが立ち止まったあの公園だ。

ほっとしたような風漓が、雑木林の中にある和風の休憩所の前で笑う。

「.....ここなら、時間を気にせずにお喋りできるよ」

暗闇からとにかく人間界に出た。畳のベンチがある休憩所は、夜なので一つだけ白熱灯が点き、自分の姿が見えるかと思ったのだが、何故か視界は霧がかかったように薄ぼんやりとしていた。

「ここはこういう所なの。私が誰か、アナタが何か、そういう思いはどうでもよくなる。観てるのは烙人だけど、選ぶのは猫羽だから.....私達は何もできないの」

「.....え？」

確かに風漓が言うように、自分が汐音という自意識が、先刻よりもぼやけつつあった。

けれど風漓は、誤魔化したいわけではないらしい。わざわざこの公園の性質を教えなければ、汐音は知らずに自我を手放していたかもしれないのに。

「猫羽は、汐音の望みを探してるんだよ。だからさっきも、途中で汐音を引き込むのをやめたでしょ？」
　そしてあっさり、おそらく大事な種明かしをされた。やはり風漓は汐音を汐音として、大した縁もないのに正しく認識できているのだ。

　何も隠したいわけではなさそうだった。風漓はただ、どう話せば汐音に上手く伝わってくれるか、入り組む事情を説明する言葉を必死に探している。
「何で、オレのこと知ってるの？　　風漓って.....猫羽ちゃんの精霊だよね？」
　猫羽ですらも、「汐音」を知ったのは翼槞を探しに闇に来てからだ。吸血鬼の姿から翼槞と呼ばれるならともかく、汐音の名を知る者は少ない。
　それだけ汐音は最近生まれた。汐音自身も、自分が誰であるのか知らないと言える。
　だから風漓も、きっと話し方を悩んでいる。汐音が何をわかっていないか、その範囲からして風漓もさっぱりなはずだ。
「オレは風漓に会ったのは初めてだと思うし、ききたいのは翼槞がどうなったのか、猫羽ちゃんが何処にいって、烙人にーちゃんがどう関わってるかだけど。これ、風漓にきいてもいいことなのかな？」
　なるべく疑問を具体化してみる。納得したような風漓が表情を少し崩し、いいよ、と笑って頷いてくれた。
「そうだよね。初めまして、だよね。汐音も翼槞も、昔の烙人に似てるから、初めての気がしなかったの。ごめんね」
　どうやら緊張感と混在する気安さの理由はそれらしい。烙人の内に精霊としている頃から、風漓は吸血鬼の彼を知っていたと言う。短い期間でも翼槞は烙人の弟子だったので、風漓の言い分は何も無理がない。

　そう安堵しかけたところで、思わぬ爆弾発言が汐音を襲う。
「汐花(しおのか)さんが焼き餅焼きだから。私は氷輪(ひわ)翼槞にはほとんど関われなくて」
　.....は？　　と、咄嗟に、脈絡のわからなかった汐音の思考が止まる。
「汐音はどうかな？　　汐音は翼槞と汐花さんの子供みたいなものって聞いたけど、汐花さんの影響は全然ないの？」

　意味がわからない。そう思いながら汐音は、ツバメも不思議がっていた理由のない勘の良さで結論に飛ぶ。
　まず汐花とは誰か。風漓の話しぶりからは、翼槞が長い間探す慌て者の天使しか思い浮かばない。そもそも翼槞がこの人間界に来たのは、かつての命の恩人であるその天使を探してのことだ。
　それと翼槞の子供が自分とはどういうことか。まず実体のない天使や、吸血鬼の翼槞に子供など有り得ない。強いて言えばツバメに血を分けたことが血縁を作る行為だ。

けれどもし、翼槞の心臓に宿っていた自分が、彼の血から生まれた心なら？　そして心の素になったものが、翼槞が預かるあの天使の羽だとしたら……。

何だ、簡単な話じゃないか。それなら翼槞とは別に汐音が存在できる理由もわかる。
納得しかけて、いやいや、と内心で派手に首を振った。とりあえず動揺は全て飲み込む。
風漓の言と、自分が飛びついた推論は何処かずれている気がした。そもそも汐音が翼槞の記憶から知る天使には、汐花という名などついていないのだ。
ならばそこは尋ねるしかない。風漓が想定している世界と、汐音が知る世界とは何かが違う。
「汐花がオレの親って……どーいうこと？」
「え？　だって、翼槞と契約してた猫羽に、汐花さんが憑いて生まれたのが汐音だよね？」
ますますドツボにはまった気がした。わけのわからない話ばかり。絡まる現実は一つずつ解くしかなく、とにかくここがおそらく、時空のレベルで異所だとまず理解する。
それも汐花という、有り得ない相手が存在する異所。過去にも翼槞は、似たような夢を見たことがある。暗闇の先はとんだ夢幻世界だったらしい。

猫羽に汐花が憑いて生まれた汐音。とんでもない設定を口にする風漓に、それは嬉しいことだと見えた。
「私、汐花さんが猫羽に憑く場合、うまくやれるか心配だったけど……それで汐音が生まれるなら、何だか兄弟みたいで嬉しくって」
「……汐花が、猫羽ちゃんに憑く場合？」
「ここではまだ世界は選ばれてない。猫羽が勝てば、汐花さんは猫羽に取り込まれて汐音が生まれる。猫羽が負けたら、汐花さんに紫雨（シグレ）を取られる。私は結果を待つだけなの」
「え……それじゃ、まだ結果が出てないなら、ここにいるオレは何なの？」
私達には何もできない。風漓がそう言った意味はわかりつつ、話すほどに汐音の混乱は深まっていく。
「これから、近い内に生まれる可能性がある命は、時の闇に先に現れるって烙人が言ってたよ。だから私、汐音を見つけてすぐにわかったの。アナタは、猫羽が同じように消える別の世界でも、私と一緒にいてくれた『シオン』だって」

ここまで聞いて、こちらの発言の方が大きな爆弾だろうと、首を傾げて二秒で汐音は気が付くことになる。
「猫羽ちゃんが同じように消える……別の世界？」
先刻、猫羽の体で汐音が目覚めた時の状況と近い。そんなことを口にする風漓は、ここが今の汐音にとって、異所の時空であることもわかっている。それで説明が難しい、と悩んでいたのではないか。

　汐音でなければとてもついていけない話だが、風漓はあっさり認めるように先を続けた。
「烙人が観ているものは私にも伝わる。烙人の代わりに猫羽はゲヘナに行ったの。そうすれば烙人の観るさざなみの世界を、汐音のために選べるようになるから」
「オレのために……猫羽ちゃんが世界を選ぶ？」
　気が遠くなるほど訳のわからない話題。なのに汐音は自らが、この夢幻のカラクリをわかりかけていることが怖かった。
「烙人兄ちゃんが可能性を作る……時雨みたいに色んな世界を覗き観る。猫羽ちゃんはその中から、オレが望む世界を探してる……ってこと？」
　こくり、と頷く風漓の静かな表情に嘘はない。たとえ猫羽が消えてしまう世界であっても、猫羽が選ぶ烙人の世界なら受け入れる、その決断が垣間見える。
　何故烙人や猫羽にそんなことができるか、それはさっぱりわからないが、「ゲヘナ」という単語が関係しているのだろう。猫羽一人の選択で世界の有様が変わるなら、それは紛れもない地獄の沙汰だ。

　風漓が汐音から目を離すと、休憩所の外の暗い夜を見やった。
「烙人が生きていたら――そもそも、私のせいで消耗しなかったら」
　汐音がいた世界では、八年ほど前に消えた烙人。神隠しで時雨になる前の紫雨に、命の残滓を残していった。化け物にしては若くして衰弱したのは、この霧の精霊を維持していたからだと、死神時代の翼槞も知っていた。
「烙人という泉を涸らして、霧の私が生まれる世界。烙人が烙人である限り変わらない運命……でも、私達と同じ、水門を司る母様が小波（さざなみ）を起こした」
「……？」
「私と烙人を、母様はゲヘナの奈落に捨てたの。選べる世界を、猫羽が可能な限り遡ったから」
　風漓が言わんとしていること。それはあまりに言葉足らずで、闇に包まれた木々のように漠然としている。
　それでも汐音は大局を察せてしまう。悪魔をやれる汐音と翼槞は、そんな直感が以前からある。
「じゃあ、このヘンな世界を最初にもたらしたのは、風漓と烙人にーちゃんのお母さん。それも猫羽ちゃんにそそのかされて……そういうこと？」
　猫羽の起源を辿っていけば、風漓達の母と関われる時間もあるらしい。風漓は無表情に頷き、暗闇を見つめる紫苑色の目を潤ませた。
「時雨には見つけられなかった、烙人と汐花さんが存在できる世界。烙人が奈落から這い上がれば、消えなくなった烙人が汐花さんを助ける。でも代わりに、紫雨に殺された翼槞が灰に戻ってしまう。だからここでの汐花さんは、翼槞を助ける方法を探しているの」

　それであれば、この異所と汐音のいた世界の共通点は、灰に戻された翼槞――そもそも灰に戻す時雨だろう。そうして違うはずの時空の共通点を接点に、時雨はこの異所を引き寄せたのか。

　時雨の剣には烙人の赤い鼓動が残されていた。貫かれて赤火を受け取った翼槞が、赤い目――ゲヘナの烙人となり、同じように翼槞が消える様々な異所に猫羽を渡しているのだ。煮え立つ火の池の水門が開かれ、打ち上げられた新たな流れへ。
「うっわあ.....泣きそう。桃花ちゃんに相談したい。今ほどそれを思ったことない」
　炎獄（ゲヘナ）は世界を包む混沌の果てと言われる。「天龍」管理者で混沌接続者の橘桃花がいれば、汐音も介入できるかもしれない。
　しかし風漓が汐音に視線を戻し、残念そうに首を振った。
「橘桃花もここにはいない。烙人に出会ってないから、桃花の形を取れてない」
　うぎゅう。八方塞がりか、と両手を座面について項垂れた。

　猫羽がゲヘナに消えて翼槞が灰に戻り、烙人と汐花が現れる世界。
　猫羽はそれを選択に入れてしまった。それも汐音の望みを探すために。
「オレが猫羽ちゃんを説得したら、ここは何とか変わってくれる？」
　呼びかけたら届くのかもしれない。「汐音の望み」を猫羽は観ているはずだ。ところがそれこそ難儀だと、風漓の幼気な顔が曇った。
「翼槞はこっちを望んでるよ。汐花さんがいる世界だもの」
　猫羽にとって、汐音と翼槞の重みは同じだろう。翼槞が消えても猫羽と汐花から汐音が現れる世界であれば、どちらの望みも叶えられる、と思っていそうだ。それはあながち間違いではなく、更には猫羽は、根が頑固だ。
「汐音に他に望みがあれば、聞いてくれると思うけど.....それはある？」
　ぐ。と鋭い風漓に言葉に詰まる。猫羽だって無闇にこの行動に出ているわけではない。

　今もぼやける自身のままで、汐音は空しい抵抗しかできない。
「.....押し付けハンターイ！　　もらとりあむ希望ー！」
「猫羽も本当はそう思ってると思う。でもうかうかしてると、ナギってヒトの望む未来に連れていかれるんだって」
「え」
「ナギは烙人をあるべきところに戻して、汐花さんのことは保って、紫雨にも違う力をつけさせようとしてる。悪神やさざなみの私達に、これ以上好き勝手はさせないって」
　うそうそ。殊勝な風漓に全力で首を振った。
「要するに風漓達に汚れ役をさせて、ナギの一人勝ちじゃん、それ。汐花を保つなら、猫羽ちゃんはこのまま消えてしまうのに？」
「.....」

「紫雨にもってことは、悪神から助けるのもツバメでなくて紫雨なんだ。それはハンターイ。オレの望みと言うかは微妙だけど、ツバメが消えるのは、オレは見過ごせないし」

汐音にとって、ツバメは最も優先すべき「鍵」。その心がどうしてあるか、いつから生まれたかはわからず、胸を張って望みとは言えない。

何気に観察力がある風漓は、汐音の迷いを見事に汲み取って返してくる。

「それは本当に、汐音の心？」

ツバメが消えるのは見過ごせない。当たり前にある「鍵」への想い。

「汐音はそう造られただけじゃない？　翼槞が『翼』の想いで汐花さんを探すのと同じように、汐音も誰かの都合でそう想ってない？」

風漓は本当に、「翼槞」の事情をよく知っているようだった。

がっくりしている汐音の前で、桜色のショールを押えてベンチから立ち上がり、そっと目線を合わせてしゃがんだ。

「汐音も翼槞も.....誰かの望みを映す人形のまま？」

「.....――」

「それは尊いことだと思う。でも.....私も猫羽も、汐音の望みが見たい」

たった一つだけで、汐音を照らすには足りない白熱灯の下で。

風漓の深い紫苑色の目には、猫羽の下宿の鏡と同じ黒髪の汐音が映っていた。

――一緒にここから出よう。

望みとは何なのだろう。生まれた理由、造られた目的とも違うものだろうか。

為すべきを成さずに何を望む。義務ですらなく、ただ生き筋だけがそこにあった。

風漓の言う通り、翼槞が汐花を探す本当の意味も、汐音がツバメを鍵にした目的も、彼ら自身から生じた意志とは断言し切れない。

何かを大切に想うことに、理由は必要だろうか。理由が存在している想いというのは、その時点で功利や打算の結果でないのか。生き物が愛し合い、子孫を作り守ることも、より生き易くなり、己の遺伝子を残すための本能の人形と言えてしまう。

考え出すと袋小路だ。それなら所詮、ヒトなど全て神の木偶に過ぎない。

意志や望みを持っているなんて思い上がり。たまたま生まれた環境の中で、与えられた条件で育ち、個々の仕様と出来事の中で成形が変わる。

「心」なんて何処にあるのか。持って生まれた己の素質を、生き物っぽく見せる多様な反応でしかない。そんな答が汐音の脳裏を駆け廻る。

畳に爪が食い込みそうなほど、気付けば指に力が入っていた。

「……オレが、造られた命、だから」
　何がいったい、己の声を沈ませるのかがわからない。「人形」であることの何処が問題なのか、それからして「汐音」にはそもそも答がない。
「造られた目的に従えば……オレは、人形？」
　冷たい夜の公園の中、一か所が浮き上がるような休憩所で、黙って汐音を見つめる風漓の前で。
　今の汐音が思いつくこと。ツバメも翼槞も猫羽も消えないでほしい、それは叶わないのか、とふと思った。
「……オレは何も、不満なんてなかったのに。何でナギや猫羽ちゃんは、わざわざ世界を変えようとするの？」

　ちょうど梅雨の頃、悪神の時雨がツバメを乗っ取り、汐音と翼槞は表舞台から退場することになった。猫羽はツバメと翼槞を助けに来たのに、何故「汐音」の存在に拘り始めたのだろう。
　このさざなみが荒れる嵐の根幹。それを尋ねた汐音に、風漓はいっそう悲しげに両目を潤ませた。
「……山科ツバメが……汐音のいる世界を願ったから」
「――え？」
「猫羽が本当に叶えたいのは、そうだね……ツバメと汐音の望み、だと思う」
　それは言いたくなかったらしい。けれどここまでの汐音の察しの良さに、隠すことはできないと風漓も瞬時に悟っていた。

　何だ、と、不思議な決着があった。それならあのバカを止めればいい。
　汐音が猫羽の体で目覚めた時から、ツバメの挙動はおかしかった。ツバメが汐音を優先するなら、猫羽も意向を汲んだのだろう。
　それはダメだ、と頷く。ツバメと汐音は猫羽を見守るために人間界に来たのに、本末転倒になってしまう。
「――ねぇ。オレをツバメの所に、連れてってくれる？」
「……」
「ツバメの主人は実際、オレじゃなくて翼槞だしさ。ツバメが守るべきは、猫羽ちゃんや山科の家なんだから」

　何が望みか、ときかれたら、汐音に言えるのは一つしかない。このおかしなさざなみを早く、元の静穏へ戻してやること。
　それが人形の望みかどうかは知らない。「元の静穏」がどういう世界かもわからない。ただ、汐音が退場し、翼槞が天で眠る現実に特に変化は必要ない。ツバメは時雨になるかもしれないが、それもツバメの姿の一つだ。

この「賭け」そのものを起こさなければいい。時雨がわざわざ、翼槞を灰に戻さなければ、猫羽もゲヘナの扉をくぐらないのだ。

簡単で自然な結論を、あえてややこしくするのが「さざなみ」らしい。
風漓は残念そうに笑い、すっくと立った。少し歩くよ、と言って、長く話した白い明かりの休憩所を後にしたのだった。

そして汐音は風漓に連れられ、もう一人のさざなみが待ち受ける赤い池沼、ゲヘナの一画に拙く踏み込む。

ツバメと赤い目の翼槞（烙人）と、猫羽の体に取り込まれた汐花。
広い自然庭園の片隅、小さな川べりで対峙する三者を見てしまった時、あ、だめだこりゃ。汐音は己の間違いを悟った。

――何だ.....楽しそうじゃん？　烙人にーちゃんも、翼槞も.....例の、汐花も。

いずれ消えゆくさざなみとして、仮初めに姿を顕した彼らを、一度たりとも見てはいけなかった。
特に汐花。見た目はほぼ猫羽であるのに、闇に映える雪白の髪を目にして、自分でも驚くほどの安らかさが汐音を襲う。

翼槞の姿をしたさざなみ。赤い目の烙人が、ツバメに何某かの是非を尋ねる。
「『汐音』を救えるものは何。オレの答はこの世界だけど、オマエは？」
汐音が説教するまでもなく、ツバメは既に圧倒されている。
彼らが佇む小川から少し先の、水が流れ込む小池で汐音は立ち止まった。それ以上近付く気になれず、遠目から眺める汐音が赤い水面に映る。
翼槞の残滓とも言えそうな、幼げな烙人。茫然としているツバメに容赦なく続ける。
「オマエにも答があったんだろ。汐音がヒトとして、そのまま生きられることが汐音の幸せに見えた。時雨もツバメも――違う？」
人形かヒトか、答を教えてくれ。そう問うた時雨の姿が汐音によぎる。
「じゃあオレは言う。オレも汐音も、この世界を成立させるための人形である方がよほど幸せ。この世界が紫雨を取るなら猫羽を捨てて、猫羽を守るなら紫雨を捨てる。オレはどっちでもいいよ。それがこの世界であれば」

　それはきっと、風漓の言ったこの異所の裏側の実状だった。

――猫羽が勝てば汐花さんは猫羽に取り込まれて、猫羽が負けたら汐花さんに紫雨を取られる。

　理解する必要はなさそうなものの、猫羽と汐花は、紫雨の扱いを巡って争うと見える。どちらにしても汐花は残り、猫羽の体に汐花が宿る場合は、守られた紫雨はそのまま残る。汐花が勝ち紫雨が奪われた場合、猫羽の存在は残って紫雨が何か違うものに変わる。

　今のところ、そこにいるのは紫雨でなくツバメだが、このさざなみが固定してしまえば彼は紫雨になるのだろう。
　汐花が求めるものは多分、紫雨が奪った翼槞の翼だ。紫雨の内に翼槞の翼があり、翼槞の姿をしている者は汐花にとって烙人なら、紫雨を翼槞に変えたいのだろうと何となくわかる。
　相変わらず勢いだなぁ、あいつ……雪白の髪に苦笑混じりにそう思ったのが、果たして「汐音」の心なのか、遠目で立ち尽くす吸血鬼にはわからなかった。

　翼槞の烙人に問い詰められて、答えられないツバメが憐れに見えた。
　ツバメは自身の思いを言葉にするのが苦手だ。考えていないわけではなく、むしろよく考え込む方だ。それ以前に何故、翼槞の烙人に問いただされるかがわからないはずで、時雨のせいといえど大きなとばっちりだろう。
　ただ、「汐音」が続くことを願う。それ以上でもそれ以下でもない。
　ヒトだの人形だの、そうした話に拘ったのは時雨なのだ。どうして外野は皆、単純な願いを難しい話にしたがるものか。
「……どう考えても、時雨のせいか。アイツは何で、オレ達がヒトか人形か、そんなに悩むのかな？」
　思わず呟いてしまう。汐音とまだ陰にいる風漓が、同情するように小川の方を見ながら言った。
「ヒトとしての望みを見つけないと、汐音がいなくなるから、じゃないかな。汐音はすぐに、誰かの望みを映して変わってしまう人形だから」
「……」
　この場に来てすぐ、汐花の存在を見て心が変わった。そんな汐音の移ろいやすさが、時雨は気に食わないとでも言いたげの話。
「確かにそれこそ汐音だけど。ツバメや猫羽が探すのは、翼槞でもツバサでも紫音でもない、汐音なんだと思うよ」

　また難しい話になってしまう。言う通り汐花の存在を喜ぶのは翼槞――ひいては彼らの本体(オリジナル)、つばさの心だろう。最近生まれた汐音は実際、その天使に会ったこともない。
「でも、翼槞やつばさが喜べばいい、それもオレ(汐音)の心とは言えない？」
「……そうだよね。汐花さんと本来、一緒に存在できない汐音にはわからないはずだよね」
　小川からは見え難い場所に隠れる汐音の斜め後ろで、今も寝間着のような服装の風漓が俯いた。
　汐音はツバメ達の成り行きを窺うので精一杯でもある。だからそこで、風漓に起きた変化をおし止めることはできず――

　橋の方では、汐花憑きの猫羽を受け入れるか、猫羽を戻したいなら、汐花の要求を受け入れて翼の竜を選べ、と謎の選択をツバメが突き付けられていた。
　どちらにしても、この異所の時空からは出られない。詐欺だ、と悩むツバメを、援護するか説得するか、汐音が本気で悩み始めた時のことだった。

　汐音の背後で、赤く見えていたはずの池が青く変わった。
　ゲヘナのような夏夜の熱気が変じた。空気の異変にはすぐに気が付き、振り返った汐音を待っていたもの……それは今も橋の方へ、汐音が近付けない本当の理由だった。

　つい先ほどまでは、紫苑色の髪と目をした娘がいたはずの平地で。
　祈るように両手を組んで、青い水面を背にする長い雪白の髪の人形がそこにいた。
「――……っ」
　あまりの動揺に思わず後ずさった。悲しげな紅い目が見据える汐音にも変化が訪れる。
　今まで意識はともかく、己の姿がよくわからなかった汐音であるのに、この瞬間には明らかに猫羽の体になった。それはきっと、目前の雪白の人形と対峙すべきが、猫羽であるからだった。まだ赤い世界の小川の方には、汐花が憑く雪白の髪の猫羽も存在しているというのに。
「何で……汐、花……？」

　猫羽の姿になった汐音を、風漓だった雪白の髪の人形が紅い目で見つめる。日本にしては長いシフォンスカートが、風もないのにふわり、と広がっている。
　夏場なのに足首を隠したショートブーツ。柔らかで長さの違うツインテールの下、天女のように桜色のショールを羽織る雪白の髪の娘。
「……これが、氷輪汐花。ここでの私と汐音。私も汐音も、ここでは裏方だから」
　意識の変わらない汐音と同じように、風漓も中身は変わっていない。
　それでも汐音は、雪白の娘の姿に体が震えた。その感情は喜びでも恐怖でもなく、ただ激しく、胸が痛くなった。

「どうして汐花さん、ここでは消えないと思う？　……私が烙人と一緒に、翼槞が連れる汐花さんを守るのがこの世界なの」
　雪白の娘の顔は、確実に翼槞がよく知る天使と同じだ。この世界では本来、こうした人形型の高度な依代を使うのが汐花なのだ。
　猫羽に汐花の気配を感じるだけでも心が変わったのに、こうも間近で懐かしい目を見ると、汐音という意識が一瞬で吹き飛びそうだった。

「でも私、悲しかったよ。翼槞に悲しんでほしくないから、汐花さんを頑張って守ったのに……汐花さんがいると、探し続ける願いのない人形の翼槞は、いずれ闇に還ってしまうから」
　できるだけ、頑張ってみる。消えた天使とそう約束し、死神となって必死に生き繋いできた吸血鬼。
　そうでもなければ、敵が多い生まれの吸血鬼は滅びていくという。天使と吸血鬼が二人共、末永く幸せな世界はないのかもしれない。
「ここでの私は猫羽を守っていない。汐花さんのために存在して、汐花さんが猫羽に遷った時に、初めて私を自覚する」
「……え？」
「猫羽の中に潜む可能性……シオンが私の形をくれるの。汐花さんが猫羽に負けて存在が消えかかった時、汐花さんがいない私達の世界に、私とシオンはやっと繋がる」

　灰に戻った翼槞の存在――それを行うシグレ、ひいてはツバメが、汐音の元いた所とこの異所の接点であるように。
　汐花が消えれば、汐音と風漓が表舞台に立つ更なる異所が別に現れる。それはもう、望めばすぐそこにある、と風漓は言った。
「烙人と私が、汐花さんを守らなかった世界。汐音はこのまま、汐花さんを望む？　それとも私と……私と一緒に、その世界でヒトにならない？」

　この異所の存続を選ぶなら、汐音は誰かの望みを映す人形。
　しかしその最後の選択を望むなら、それはヒトの答、と言わんばかりで。
「汐音はヒトだし、ヒトになれるんだよ。……本当だよ？」
　汐花が守られないなら、汐音がその道を選ぶのは自身への裏切りだろう。つい数分前まで、汐花の気配に安らぎを感じた自分も本当なのだから。
　それであるのに、風漓の声に耳を塞げなかった。汐花の顔で差し出された手を、とても胸が痛いのに凝視してしまう。
　ここから出よう。あの鏡の自分（セイ）と同じ誘いを、風漓はついにかけてきたのだ。

「そんなの――.....オレ、は.....」

その手を取りたい。己の心と矛盾する咄嗟の衝動。

そんな揺らぎこそがヒト、と汐音は知らない。寄せては返す感情の波。水底に溜まる澱みを浮かべ、己を濁らせていくさざなみ。

打ち寄せ溢れ出す魂の高鳴り。その音が何処からくるのか、ただ、この胸の底を知りたい、と不意に祈った。

沈む心をかきたててくる、風の名を持つ娘が、差し伸べた手を拙く震わせていた。

「私はずっと.....ずっと、貴男に会いたかった」

人形の目であるはずなのに、じわりと揺らぎをたたえる紅い硝子。

誰がいったい、誰に向かって言っているのか。風漓と汐花、どちらの声かも妖しくなった昏い誘(いざな)い。

雪のように冷たい霧が、夜の淵から漏れ出していた。もう猫羽の体を使う自分も見えなくなって、領海が白く霞まされていく。

「.....心を、開いて」

その呪(しゅ)がおそらく、最後の一線となった。

誰かがずっと、汐音に呼びかけていた。それはただ、助けてほしい、と――

――赦してほしい。その声が聞こえてしまったから、汐音は薄れゆく心の中で扉を開けた。

洩れ出でるのは、白い霧夜に混ざった小さな光。それだけがここでは必要なのだと、祈りを知ったかつての悪魔に、小さな死神の願いが満ちていった.....。

-please turn over-

_anima:『黒火』

当たり前のように失ってきたから、失くしたものを深く思うことなんてなかったんだ。自分でないようにかすれた声で、気づけば細く呟いていた。

痛みはいつもそこにあるもの。探すことだけはやめずにいても、何を見つけたいかもわからなかった。

消えたヒトの鏡像を見つければ、もう一度会えると思ったのか。中身が何でも良かったのなら、似た者には既に出会ってきた。そのヒトでなければ駄目であるなら、それはもう何処にも存在しない。わかりきった願いを、どうして探し続けたのだろう。

そこが位置的には日本の中央部であると、「彼」は突然思い出した。

目が覚めたのは、ランクが高めなマンションの一室。猫が飼える条件で彼、茨月惺(しづきセイ)はその部屋を選んだ。結局飼わずに今日も独りきりの寝床で体を起こした。

茨月惺は開業医の家に生まれた。忙しいが優しい両親、何不自由ない生活がとても恵まれたものだと知っている。医者の家をつぐ――進学校に行くために、高校から一人で親戚のいる都会に住むことも、何一つ疑問など持たなかった。ただ、両親の望むように自分は生きないとわかっていながら、親元を離れたのは狡(ずる)かったことも自覚がある。

高校は始まってほどなくドロップアウトした。地頭は良いらしく入学までは何とかなったが、昔から勉強は嫌いだった。田舎で他にすることがなかったからやれた。

両親は当然帰って来い、と言ってきたが、バイトに明け暮れて都会に留まっていた。順風だったはずのレールをあえて降りたのは、惺の内には生まれつき理由もなく、「日常なんて簡単に崩れる」思いがあったからだと言える。

「……え？　……オレ……？」

夜中までのバイトで疲れた体。はああ。と溜め息をついたところで、「彼」はその違和感にすぐ気が付いていた。

「え……ちょ、まっ……まさかオレ、これって……」

ぺたぺたと、両手で自分の頬を触る。肩口から首の後ろだけ不精にのばした黒髪。

「いや、いやいやいや……『惺』って誰だよ、何で当たり前にオレなのさ、また何処に来ちゃったわけオレ……？」

「彼」の自意識は「汐音」であるのに、体は勝手に「惺」の記憶を起こす。
うっかり自分が、「惺」だと思いかけた。日常なんて簡単に崩れる、ほら、こんな風に。汐音のはずの頭の中で、惺がそう笑った気がした。

「待て待て待て……何これ、オレ、日本に生まれて一人暮らしのフリーター設定？」
鏡から話しかけてきた「セイ」が、とりあえず誰かはやっとわかった。
ここがどんな世界であるにせよ、「惺」は汐音という前提。体を使える以上、大部分が同質の存在であるはずだ。そもそもどうして翼槞の内に生じたのかもわからなかった汐音が、人間として日本に生まれたら惺だったのかもしれない。
それにしても現状は、納得いかないことだらけだった。
「ていうか散々、オレは汐花の羽から生まれたって振れ込みだったのに、今までのあれは何だったのさ。ていうか、だから、この体……――」
汐音のはずの自分に気が付いてから、絶え間ない違和感が体にあった。
当たり前のことなのに、汐音はそれに「違和感を持つ」こと自体にショックを受ける。
「いや、それって……でもオレ、これ……」
惺としての記憶を辿ってみる。でなければまずこの世界のことがわからない。
これまでの経緯を考えてみれば、何かを接点にまた違う時空に引き込まれたのだろう。それなら先程までいた汐花のいる異所と、ここをつなぐはずの接点……先刻までの世界と同じものが、最低一つはあるはずなのだ。
「ヒトとして生きられるって言ってたし、普通に風漓が接点ぽいけど。惺は風漓とどういう知り合い？　何でその辺、モヤがかかってんの？」
人間として育ってきた惺（自分）については、おおまかなことなら思い出せる。なのに現在、汐音が使う体において、意識を閉ざした惺の心は感じ取れない。

まるで惺が閲覧を許した記憶だけを知れているようで、思わず汐音は、猫羽の部屋と同じ建物とわかる洗面所にまず足を踏み入れた。
「向こうにあったカレンダーだと、ここは猫羽ちゃんが十六歳になる直前の日本で……惺（オレ）は高校をやめてもうすぐ一年……猫羽ちゃんと惺は同い年なんだ、一応……」
鏡の中には、翼槞の時のような黒髪。見慣れない黒の目の青年が、不安そうに汐音を見つめ返している。
「猫羽ちゃんもだし、ツバメ――時雨はいるの、ここ？　誰に会ったらわかるかな……一番近くにいそうなのは夕烏？」
猫羽が時の闇に彼らを探しにきた時、夕烏の存在は時雨が翼槞の心臓を過去に持ち込んで生まれたものと説明されたはずだ。逆に言えば、夕烏がいるなら時雨もいる。
汐音も「天龍」で同じ話を聞いた。汐音という意識そのものが、夕烏から呼び起こされるものだと。汐音の自意識があるところでは夕烏も存在している可能性が高いだろう。
「でもその場合、翼槞はやっぱり終了コース？　それともここにいるのはオレでなくてセイで、オレはこれから消えるなら夕烏はいないかも？」

部屋に戻り、クローゼットを開けると、汐音の趣味とは思い難い白いコートが入っていた。寒いのでと羽織り、鍵の入った鞄を机に見つけ、財布と鍵を持って外に出る。

夕烏の家――真羽家と、夕烏がよく預けられる教会は、どちらもこのマンションから大差ない距離だ。教会に音戯詩乃がいれば、翼槞と関わりがあるかも確かめられるため、最初は教会に向かうことにした汐音だった。

まずは駅前まで続く、緩やかな傾斜の無機質な下り坂。

立春の寒気が弱小な人間の体に打ち付け、縮こまってしまうせいか、歩く度に先刻の違和感が気になって仕方なくなった。

「あー.....これ、やっぱ微妙.....なってみてわかるものってあるね、翼槞.....」

それはおそらく、汐音と翼槞には想像し得ない体の違和感。こんな話をわかってくれそうなのは翼槞しかいないが、この世界にはまず存在しているのかどうか。

「オレだけ日本に生まれるって、凄く微妙な状況だよね.....翼槞が何かで殺られてそれで、生まれ変わったのが惺って方が、しっくりはくる.....」

翼槞の体に棲む一つの人格として、春先に己を自覚した頃の汐音は平和だった。惺の記憶をたぐるとわかるが、「一人の人」として生きていくのは、人間は結構面倒くさい。

「親にいい顔しつつ、周囲と上手く付き合いつつ、勉強やらバイトやらを頑張って、毎日学校や仕事にいくのって『普通』なんだ.....前からできる気はしなかったけど、惺はむしろ、高校入学までよく我慢できたね？」

そこには惺の複雑な心があった。医者など社会的ステータスの高い家は何かとプレッシャーが多い傾向にあるようだが、惺にはそれ以前の問題が生時からあったと見えた。

日常なんて簡単に崩れる。当たり前のように失ってきたから、痛みはいつもそこにあるもの。それは惺の胸裏を常に離れない確信だった。

思い出せる範囲で何かを失ったわけではない。ただ惺が生まれる前に、胎内で一緒にいたはずの双子が消えたらしい。それはきっと自分のせいだ、と漠然と思っていた。

憶えてもいない双子を求めていたわけではない。けれど何かが欲しくて、探すことだけはやめないでいても、何を見つけたいのかもわからなかった。

「その点で言うと、オレや翼槞は楽だったよね。翼槞はツバサを、オレはツバメを守ればそれで良かったから」

汐音も翼槞も、言ってみれば本体である「翼」の影だ。役割があるからその体にいて、それ以外のことは悩まなかった。

対して惺は、役目など決まっていないはずの人間として生きる傍ら、理由のわからない衝動に追われ続けた。その一つがここでの暮らしらしい。

「惺は何でこの街に来たのかな。考えようとすると何もわからなくなる」

選んだ都は、「親戚がいるから」という理由だ。しかしそこに世話になるわけではなく、大して親しい親戚でもない。

猫羽がいる街を、惺は偶然選ぶだろうか。おそらく話ができすぎている。

そもそも猫羽がこの場所にいるのも、一年だけの短い間なのだ。そのタイミングぴったりにわざわざ一人でやってくるとは。どう考えても惺は、猫羽――もしくはその内に在ると思われる霧の精霊、風漓に会おうとしていたのではないのか。

しかし、どうやって。

何故見も知らぬ猫羽達を目指して、嫌いな勉強を頑張れるのだろうか。

何が惺を焚きつけたのか、その答こそ、今目指している教会で汐音を待ち受けていた。

そのことに汐音が気が付いたのは、赤い煉瓦に囲まれた建物の中から、凡庸な住宅街に薄くしみわたる歌声が聴こえてきたからで――

“この歌に身をゆだねて。音の波に深く沈んで”

それに気付いたのは「汐音」だった。紛れもなく風漓と詩乃の声だ。汐音をここに呼び込んだ呪（しゅ）。

この世界に二人がいたとして、汐音の知る声色をしていると、どうして断言できるだろうか。だから惺が思ったことではない。

“心の底から溢れる気持ち。震える風の音はどこから来るの？”

音戯詩乃には「歌物語」をヒトの意識に刷り込ませる力がある。それをこれだけうっすら広げているのは、「霧」と呼ばれる風漓の影響だろう。

二人がいったい何をしているのか、汐音は何故か戦慄を覚えながら扉を開ける。

何処かで予想していた通り、その礼拝堂にいたのは、制服の猫羽と地味な普段着の詩乃だった。猫羽がいるのでなければ、風漓は単体ではおそらく存在できない。

しかし案外、予想していなかったもの。祭壇の前で十字架を見上げ、並んで歌う猫羽と詩乃を長椅子で見守る、翼槞としか思えない黒髪の学生姿があった。

「――え？」

惺として存在する汐音とは別に、翼槞は何の瑕疵もなく命を続けていたのだろうか。羽が幾枚か足りない気配がするが、元の世界と同じように、ツバメや夕烏に渡した後であれば是非もないことだ。ただしその場合、心臓もなくして眠っているはずなのに。

驚く間もなく、「惺」としての意識が突然、汐音を隠すように浮上してきた。

歌う二人と、座る学生。扉を開けた白いコートの惺に、三人が当然のように歓迎の心を向けたせいかもしれない。

「……約束通り来たよ、オレ。詩乃サンと風漓……それに、猜（さい）」
　自分の口が知らない名前を紡いだ。汐音は咄嗟に驚愕するが、惺は何もお構いなしだ。

　黒髪の学生服の青年が立ち上がり、ゆっくりこちらに振り返った。
　その目は汐音に否応なく、時の闇の旅路を思い出させる炎獄の赤火。扉の前で立ち止まって待つ惺に、赤い目が月のように儚く笑いかけた。
「……ご苦労様、惺。『汐音』をここまで連れてくるの、大変だったろ」
　確実に翼槞の体でありながら、声は若い頃の烙人のもの。汐音も烙人のことはよく知らないが、それがゲヘナの「さざなみ」の使者……一つ前の異所でツバメを問いただしていた、翼槞の烙人と近いことはわかった。
　おそらくあの異所から、この惺の世界に汐音をよんでいた者。黒幕といっていいだろう存在に、汐音は全霊で警戒を纏う。

　しかし惺の体は、その労いに安らぎを感じ、顔が勝手に穏やかに笑った。
「オレは猜に出会えて良かった。それでたとえ、オレが消えたとしても」
　赤い目な翼槞の烙人は、ここでは「猜」らしい。「さい」の響きは心当たりがある。
　もしも由来があるとすれば、翼槞が本来名乗るべき故郷の名のアナグラムだろう。翼を本体とする彼らが、吸血鬼として復活させられる前の、人間の子供だった頃の名前だ。惺と併せれば「再生」なんて、タチの悪い冗談のような語音ができあがる。

　たった今まで、猫羽と一緒に歌っていたはずの詩乃が、ふっと消えた。
　惺が視線を猜に遷した一時のことだ。惺と猜と猫羽――風漓。このさざなみの三人が集う場には、神性の家系であるだけの詩乃はそぐわない。しかしその退場が何か大事なことを意味するように、汐音には感じられた。

　ここで確かめなければいけない。惺の口にした不穏な言葉も含めて、汐音があえて体を使おうとすると、惺が抵抗することはなかった。
「……惺が消えても、って、どういうこと？　――猜」
　後端の扉の前と、最前列の椅子の横で、汐音と猜は互いを見据える。猜は汐音が別世界での自意識で、惺の体を使うことまで織り込み済みでそこにいるのがわかる。
「オマエ――猜は、烙人にーちゃんと翼槞の合いの子、みたいな感じでいいんだよね？」
「少しだけハズレ。オマエが感じる通り、オレの体は翼槞で、中身は大体烙人だけど」
　無意識に睨みつける汐音に、まるで女性のような柔和さで猜が笑った。
「『オレ』は元々、殺された人間の子供の怨念。そして烙人の赤の鼓動は、ツバメを保つためにいるから……ここにいる『猜』は、意識だけでも生き延びるためにオレに血を吸わせた烙人と、水雷の狼、桃花ちゃんの怨念」

とてもあっさり説明された複雑な事情に、汐音は思わず膝をつきそうになった。吸血鬼である翼槞が、もしも烙人の血を回収したなら、それでなくても自意識が曖昧だった二人が混ざり、意味不明な存在には充分なり得る。烙人は我が強いように見えて、ある悪魔の鏡映しなだけの心だった。

翼槞の精神状態が以前通りなら、烙人の血を吸ったりしない。そこにおそらく烙人を残したい桃花が関わっているはずで、「猜」は翼槞と烙人、そして桃花の悲願と言える。

そして猜は、ここにいる「惺」の願いも汐音に告げる。

「惺は汐音になりたがってる。汐音の望みを叶えるのが惺の願い。その惺の体で、この世界で生きることを受け入れれば、汐音は本当にヒトになれる」

それは決して、続くのは「惺」の自意識でなくて良いと言った。惺を全く知らなかった汐音は、その理由がわからずに猜を睨むことしかできない。

まるでこれが、全てのこたえ合わせだと言うかの如くに。

柔らかく微笑む猜の隣に、風漓の顔付きをした猫羽がそっと立った。

「茨月君.....セイはずっと、男のヒトになりたかったから。紫音でなくて、汐音になること――それが唯一、セイを過去ごと変えられる救いなんだよ、汐音」

は.....？　と。思考の止まった汐音に、風漓が悲しげに笑う。

「わからなくていい、でも汐音もそうだったよね？　自分は氷輪翼槞と同じ体に生まれた心で――汐花さんの羽の影響で、女の子にはなりたくないって」

ぐさり、と、当たり前の弱味を突かれた気がした。

言われてみればその通りだ。わざわざ意識したこともないほどに、汐音にとって自身は「男」だった。同じ体にいる翼槞の同胞で、たとえ山科ツバメを大事に想うように作られていても、男のままで「相方」でいたかった心。

けれど今、惺の体に違和感が消えない。そして汐音の基盤となった羽は、いつしか別の想いを訴え始めた。それがきっと、汐音とツバメのずれで、猫羽を巻き込んだ元凶。

「汐花さんは――その羽は、山科ツバメが好き。ツバメが奪った、つばさの心が好き。汐音はそれに抵抗してたんだよね？　それは恋とか愛とか、そういう好きじゃないって」

「――.....」

「それは汐音の思う通り。汐音はただ、自分が楽しいから.....一人じゃなくなるから、ツバメと一緒にいたかったんだって」

心臓が、小さく刺されるように痛んだ。

言葉にされてしまえば、何と身勝手なこと。ただ言われるだけで痛いことなのだろう。

「でも汐花さんの羽は違う。ツバメが他に想う人がいること、それが辛くて一人占めしたい感情.....その名前は、『嫉妬』だよね？」

淡々と話す風漓。言うことは全て、猫羽が見つけた答の代弁に聴こえる。

「それは『鍵』の心というより、汐花さんが汐音に残した、『罪』だと思うよ。汐花さんの忘れ形見の橘水葵が、『嫉妬』を象徴する悪魔(リタン)なのと同じように」
――きっと、知っていた。
紅い瞳の天使が水葵を使役できたのは、生前の血筋と、その罪を宿す者だったから。おそらく羽に宿る心の残滓が全てを認めていた。

「汐音がその汐花さんの罪に負けたら.....ツバメに沢山犠牲を払わせることになる」
汐音が自分では理解できずに、時の闇に行こうとした真の理由。翼槍を犠牲に、心臓を明け渡しても時雨の誘いに乗ってしまったのは、風漓の言うことが妥当の気がした。
「ツバメは、汐音がもし望めば全てを捨てるって、汐音はわかってたよね？　だから何も言えなかった。汐花さんの人形でなく、汐音のままでいるために棯時雨の手を取った。時の闇に打ち捨てられて、全てを失った時雨と、汐音の望む形で相方になるために」

「汐音が望む形の相方」。それは汐音が心も体も男になることだ、と風漓は言っている。男性の惺がいる世界は、だから必要なのだと。人間の男性な惺の体に汐花の羽はなく、羽の影響を完全に断ち、汐音として独立できる道と言える。
それが最善であるかどうか、猫羽は測れていないと見えた。汐音の望みは惺――男性になることか、それとも汐音自身が見出す望みを待って、この闇路を見せたのだろう。

風漓の話は明晰で、何も間違っているとは言えない。汐音が自身を理解できるように、極力わかりやすく話してくれた。
ここでの風漓は、惺という人間を愛し、猫羽の体を借りてでも、人間界に留まることを決めた悪魔(ヒト)らしい。それを可能としたのはおそらく、猫羽に出会い、悪魔を扱う術の手ほどきを受けた惺だ。
このまま惺が汐音になれば、風漓の想いはどうなるのだろう。風漓は猫羽の体を完全に奪う気はなく、それでいいと思っている。風漓も惺も、猫羽と汐音の体の中で契約を行い、ひっそり想い合って生きていくのだと。

気が付けば今一度、汐音は両手を強く握りしめていた。
「.....ツバメは、オレの『鍵』だから」
何がいったい、己の声を沈ませるのかがわからない。「惺」になることの何が問題なのか、今の違和感以外に「汐音」には答がない。
「汐花の心を切り離せたら.....ツバメを、守れる？」
一度、口にしてしまうと、何故かじわりと涙が溢れ出て来た。
この涙は誰の想いなのだろう。汐花の羽が訴える独占欲を、本当は持ちたかったのかもしれない。自分だけでは抗い切れないから、時雨の誘いに乗ったと言える。

泣いているのは、汐花を探し続けた翼の心だろうか。惺である汐音にその心は宿りようがないのに、次から次へと止めどなく涙がこぼれる。
「ごめん、風漓.....風漓の言うこと、凄くよくわかるのに.....それは多分、『オレ』の望みじゃないと思う.....」
「.....――」
汐音が涙し始めたその時から、風漓の表情は僅かに目を見開いて止まった。つまり風漓も予想しない反応だったらしい。
「オレ自身は――汐音は、汐花に会ったこともないのに.....羽の力に、心の欠片に縛られてるなら、オレはやっぱり人形だと思う.....それでもオレは、オレだけのために、汐花の羽を手放したくはない.....」

もしも今、己の心を言葉にできるとすれば。
ただ、淋しくて仕方がなかった。それだけだった。
たとえ自分が、その羽の主の人形であっても、ヒトもそもそも神の木偶だ。汐花の羽が彼らの運命を狂わせても、振り回されることを汐音は選んだ。

黙り込んでしまった風漓と、俯き震える汐音の姿に、猜が訳知り顔で笑った。
「――まあ、わかってたけど。汐花の羽を捨てろなんて、オマエに受け入れられるわけがないって」
「.....」
「といって、ツバメに悪影響が及ぶのも許せなくて。だから汐音は、時の闇に引っ込んでるのが無難。更に言えば、惺の体になるのも正直微妙。これはまあ、翼槞の女体型に慣れ過ぎた弊害かな」
くすり、と笑った猜に思わず顔を上げた。
ここに来るまで、翼槞に話したい。と思ってならなかった違和感を、目前の怨念は察してくれているらしい。

深い黒瞳に映る者の現状を、視通す直感を持っていた桃花の影響かもしれない。桃花の怨念も引き受けたという猜が、赤かった目を黒く染めて汐音を見つめていた。
「たとえ自分の存在を闇に隠すことになっても、汐花もツバメも、汐音は切り捨てられない。それは翼槞――つばさがずっと、汐花を探し続けた理由と同じ」
「.....え？」
「わからない？　とても簡単なことなんだけどさ。大事なものは全て、等価に大切な氷輪翼が、汐花とツバメだけは特別だって定めた理由」

　そこでぎゅ、っと風漓が猜の腕に寄りかかった。
　それは風漓が、汐花に勝てない理由だ。汐音がここで、惺になると思うほど風漓を想わない現実がある。

　風漓は言えなかったことを、哀れむような猜があえて明るみに出した。おそらくそれは、ここまで捻れたゲヘナのさざなみを終わらせるために。
「汐花は思い込みが強いんだよね。優しいヒトだったけど、一度好きになれば地の果てまで追いかける執念も持ってる。ツバメはツバメで、仕える主が基本一番、自分より大事っていう壊れた奴だからね」
　え。頭が真っ白になる汐音も構わず、猜は続ける。
「オマエは人形か、それとも鏡か、空の白火か。何であれ自分を特別に想うものを特別に扱う、その強い光を映す水月がオマエ達だから」
　要するに、一番好きになってくれる人を最も好きになる、そんな身も蓋もない話に聴こえた。それで言えば風漓の場合、惺以外にも大切なものが沢山あるのだろう。
「その在り方が、人形の性だと悲しむのは、時雨や猫羽の勝手」
「.....」
「時雨は汐音と遊びたがってるけど、汐音に仕えるのは自分の勝手ってツバメはわかってるし。猫羽ちゃんの今後も含め、あのバカをどういなしてくかは、汐音がじっくり悩めばいいこと」

　ふふん、とそこで不敵になった猜は、翼槞にも烙人のようにも見えた。
「汐音は、猫羽になりたくはないの」
「――え？」
「初めの世界に戻りたいんだろ。それが汐音の望みのこたえじゃないの？」
　この一連のさざなみを終わらせること。始終それを思っていた汐音に、猜は最も容赦なく核心をついた。
「猫羽になれば、遠慮なくツバメの傍にいていいし、どれだけ大事に想ってもいい。オマエ達がほしいのは、ずっとそれだけ.....家族だよね？」
　遠い日に、烙人は弟子の吸血鬼に同じことを言った。
　その時の生まれたての翼槞には、よくわからなかったこと。あっさり口にする相手に思わずかちんときてしまった。
「それじゃ、猜は――烙人にーちゃんは、この世界が続かなくていいの」
　ここはやはり、烙人が唯一残る世界なのだ。でなければそんな汐音の望み、ひいては氷輪翼の体に棲む者達の心を総括できない。

　やっと桃花と共にいられるはずの烙人が、黒い目のまま遠く笑った。

「諦めを残した結末より、探し続ける希望の方が、オレは好きだよ」
　その言はつまり、この世界も、烙人の望みには足りないと言わんばかり。
　相変わらず強欲だ。翼槞は決してしない幸せそうな笑顔に、汐音もようやく闇から目覚める決心がついた。

　タイミングを測ったように、背後の扉から風が吹き込み、礼拝堂が暗転していった。
　闇に眩む聖域に、ちらり、ひらり、と見落としそうな薄い光が舞った。
　一瞬で消えていくように、白く風に煽られていく花。その意味を感じた途端、胸を貫く温かな痛みと、大切な誰かの微かな泣き声が聞こえた。

――アレルヤ――

　教会に来た時とは違う、幼げな重奏。その声にも詩乃が人に刷り込む言霊の呪(しゅ)が潜む。礼拝堂から消えていたのに、誰の心を詩乃は歌っているのだろう。
　本当は疑問に思う間もない。彼と詩乃の縁を繋いだものは、たった一人、紅い瞳の天使だけなのだから。

　胸の泣き声が治まるまでに、完全に暗闇と化した周囲の中で。
　ぽつんと鏡の中にいた彼――教会まで白いコートを羽織ってきた惺が、俯きながら立ち尽くしていた。
　この闇の旅路に汐音を誘(いざな)った者。人間界では珍しいだろう本物の悪魔使いが、汐音の胸を揺さぶる断末魔をそこで発した。
「……そっか。汐音は……惺(オレ)にだけは、なってくれないんだ」
　あまりに悲しげで痛切な惺の声。――助けてほしい。
　人形の性でありながら、惺の望みは映さない汐音を断罪する悲痛。

　そのこたえを返すのは躊躇われた。
　それでも汐音は口にするしかない。彼は元々、人の悪魔を狩る死神だったのだから。
「……そうだよ。だってそれが、オレ達の望みだから」
　悪魔は人間の願いを叶える。死後の魂を悪魔のものとする代償に、人間が自分でどうにもできない望みの夢を見せる。
　その最たる望みを彼はよく知っていた。人間が悪魔と契約する時、一番多く見る夢は「死にたくない」走馬灯なのだ。
「ここでのお前は死者だよ、セイ。……知ってただろうけど」

　日常なんて簡単に崩れる。本来生まれる双子の命を使い、闇に堕ちるはずの黒火が無理やり生まれ出た世界。

だから惺は、汐音として生者になりたかった。悪魔使いとなってまでも。

黒闇の中、汐音の手元から小さな光が顕れる。惺が泣き出しそうな顔で笑った。

汐音、ひいては翼槞は、本来「葬送」の鍵を継いだ死神だ。黄泉の扉を開けて死者を送る。死者が何処に還るかは誰も知らない。

黒い手袋に纏わりつく光が「葬送」の鍵。消えた天使から預かる羽の光で、汐音の元となった祈り。この世界に来る直前、最後の扉を開けた光が、惺を送る役目のために宙に舞っていた。

それでも汐音は——

「.....烙人にーちゃん達と一緒にいなよ。オマエだってまだ、自分の居場所を探していいんだ」

それは彼だから言える背信。元は天使の役割たる「葬送」を担う彼が、悪魔、死神と呼ばれる所以がここにある。

彼は神に救っていらない。だから神の所与である「葬送」を使えど、神の戒め全てに従うことはない。いつかそれで彼が滅んだとしても、自業自得。だから彼はまだ、神というやつを好きでいられるままだと思える。

闇に惺の黒い髪と目が融けゆく寸前、誰かが惺の手をひいた気がした。

ほっとしたので、汐音も目を閉じる。これは要するに、性質の悪い悪魔祓いの一つだった。

ここから目を覚ます世界が、きっと本当に、汐音が望む戻るべき世界——

目覚めて第一声が、詩乃の謡(うた)の消去動作だった時、汐音は特別驚かなかった。
「ほら、手を握って開いて、体をのばして、息を大きく吸って。ゆっくり時間をかけて、しっかりと吐いてね――」
明るくなった礼拝堂で、詩乃の膝枕で長椅子に横たわっていた。
椅子の前ではツバメが心配げに膝をつき、眠る者を覗き込んでいる。これはつまり、始まりに戻ったのだ、とここにいる汐音にはすぐにわかった。
「残念だけど、猫羽ちゃん.....彼、あなたの体を使う気はないみたいよ。だから猫羽ちゃんとして目を覚ましてね.....心配しなくても、彼はちゃんと、一緒にいるから」
そこにいたのは、翼槞の元上司ナギに言われて猫羽を迎えに来たツバメと、猫羽をそもそも時の闇に送った張本人の詩乃。
どうやら猫羽が闇から還るくだりで、素直に帰らない一悶着があったのだろう。それで詩乃が家系の力を使い、猫羽が観ていた夢物語を、己の謡で汐音に送ったのが今までの呪(しゅ)だった。

まだぼーっとしている体で、何とか起き上がったものの、猫羽の意識は内に潜む汐音より胡乱だった。
「.....わたし.....？」
詩乃が目配せし、ツバメが頷き、椅子から引き受ける形で猫羽をよっとおぶる。汐音になった猫羽でなく、汐音が潜むだけの猫羽をこれで連れて帰ってくれる。
猫羽が汐音になってからでは、ツバメは汐音を優先してしまう。それならこうして、ここからやり直すしかない。猫羽が消えた後悔を、詩乃がどれだけ予感していたかはわからないが、引き戻すために全力を振るったことは疲れた顔に滲み出ていた。

教会を出るツバメの背中で、十字架の麓から猜の声が聞こえた。
――汐音は、猫羽になりたくはないの。
あの赤い目の影は見えず、気配も何もそこには存在しない。ただ、ツバメが真羽家に向かっているので、夕烏の翼槞が待つことはわかった。
それならこの世界でも、猜は現れ得るのだ。時雨に赤の鼓動を渡され、居場所をなくした翼槞が夕烏の内にいるのならば。

「……なりたくないわけ、ないだろ……」

眠る猫羽の声を使い、寝言を呟く。それくらいは許してもらう。

ツバメが困ったように笑った。どうやらこの後、猫羽の内の汐音をどうするか、色んな者に相談するつもりらしい。

落胆が冷たい体から伝わってくる。こんな形ではなく、「汐音」が無遠慮に生きられる世界をツバメは望んでいる。

望む限り、ツバメはしばらくツバメでいるだろう。こたえはこれから探せばいい。

-了-

聖霊火

著　　pierrette***

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社